いつもお世話になっております。角川書店のオススメ新刊をご案内致します。
ぜひ書評、プレゼントコーナーでの紹介をご検討お願い申し上げます。
お問い合わせ等がございましたら、下記担当者までお願い申し上げます。
株式会社KADOKAWA　角川書店第一編集局 パブリシティ担当：佐々木 愛（sasaki-a@kadokawa.jp）
〒102-8078 東京都千代田区富士見1-8-19　TEL：03-3238-8555　FAX：03-3262-7646

心ふるわす恐怖と感動の物語　珠玉の怪談短篇全６篇

営繕かるかや怪異譚

著：小野不由美

発売日：2014年12月3日　頁数：272頁
体裁：四六判上製　価格：本体1,500円＋税
カバーイラスト：漆原友紀（『蟲師』『水域』）
特設サイト：http://www.kadokawa.co.jp/sp/2014/karukaya/
怪談専門誌『幽』twitter：https://twitter.com/kwaidan_yoo

――推薦コメント続々！――

道尾秀介氏（作家）
作中の雨が文字を濡らし、恐怖が文学を震わせる。
これも一つの怪異かもしれない。

中村義洋氏（映画監督）推薦コメント
怖い……。早く、早く来てくれ、かるかや！
そう念じながら読み進めていくこのワクワク感！
これは是非、「ホラーは苦手だ」「怖いのはちょっと……」という人に読んでもらいたいです。

著者からのメッセージ
郷里中津のイメージを借りて、懐古的な匂いのする怪談を目指してみました。古い建物や風景に漂うかげろいを漆原さんが素敵な絵にしてくださいました。この絵のように、どこか不安だけれど惹かれてしまう――「古いもの」にまつわる、そんな気分を思い出していただければ幸いです。

漆原友紀氏　（漫画家）
古い日本家屋、袋小路、水路、河童の手……心ときめくものばかりの物語で、読後すでに絵のイメージは出来上がっていました。恐ろしいものがそこここに潜んでいる、でも美しさも共存している古い家の奥へ奥へ、おそるおそる（少しワクワク）襖を開けて入ってゆくような。読みながら得たそんな感覚を絵に出来たら、と思いました。そして、そんな家々の「障り」を、淡々と「繕う」事で治療してゆく尾端さん。素敵です。ただ、外見の描写がほぼ無かったので、描くのにはちょっと悩みました。読み手の方々のイメージの邪魔にならなければ幸いです。

あの家には、障りがある――

住居にまつわる怪異を、営繕屋・尾端が、
鮮やかに修繕する。恐怖と感動の極上のエンターテインメント、全6篇！

【内容】
◎叔母から受け継いだ町屋に一人暮らす祥子。まったく使わない奥座敷の襖が、何度閉めても――開いている。（「奥庭より」）◎古色蒼然とした武家屋敷。同居する母親は言った。「屋根裏に誰かいるのよ」（「屋根裏に」）◎ある雨の日、鈴の音とともに袋小路に佇んでいたのは、黒い和服の女。――あれも、いないひと？（「雨の鈴」）◎田舎町の古い家に引っ越した真菜香は、見知らぬ老人が家の中のそこここにいるのを見掛けるようになった。（「異形のひと」）ほか「潮満ちの井戸」「檻の外」の全６篇。

【初出】
「幽」（KADOKAWA刊）vol.015（2011年7月1日発売）、vol.016（2011年12月16日発売）vol.017（2012年7月2日発売）、vol.018（2012年12月17日発売）、 vol.019（2013年7月1日発売） vol.021（2014年7月4発売）に掲載。

【著者紹介】小野不由美（おの・ふゆみ）
12月24日、大分県中津市生まれ。京都大学推理小説研究会に所属し、小説の作法を学ぶ。1988年作家デビュー。「悪霊」シリーズで人気を得る。91年『魔性の子』に続き、92年『月の影 影の海』を発表、「十二国記」シリーズとなる。「十二国記」と並行して執筆した『東京異聞』『屍鬼』『黒祠の島』は、それぞれ伝奇、ホラー、ミステリとして高い評価を受けている。「悪霊」シリーズを大幅リライトし「ゴーストハント」として2010年〜11年刊行。12年、二作が相関関係にある『鬼談百景』と『残穢』を刊行し話題に。『残穢』は第26回山本周五郎賞を受賞。

現在も日本唯一の怪談専門誌「幽」（KADOKAWA刊）で「営繕かるかや怪異譚」を連載中。（次号22号は2015年1月末日発売予定）

【営繕】の意味
建造物の新築と修繕のこと。（三省堂『新明解国語辞典』第四版より）一般的には模様替（リフォーム）なども含む。

【かるかや】の意味
山野に自生する多年草。葉はイネに似て、秋、ムギの穂に似た小さい花を葉のわきにつける。高さは1.5メートルくらいに達する。（三省堂『新明解国語辞典』第四版より）